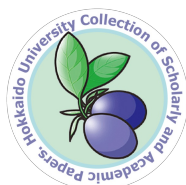




Title	アダム・スミス同感判断論における相互性の構造と自然法学（3）
Author(s)	井上(町村), 匡子; MACHIMURA INOUE, Masako
Citation	北大法学論集, 47(3), 85-116
Issue Date	1996-09-27
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/15679
Type	departmental bulletin paper
File Information	47(3)_p85-116.pdf



アダム・スミス同感判断論における相互性の構造と自然法学(三)

井上(町村)匡子

目次

はじめに

第一章 近代自然法の成立と社会契約論

(四七卷一号)

第二章 道德の世界

第一節 道德の世界

第二節 道德哲学の構造転換

第三節 認識論と道德論——「外部感覚論」

(四七卷一号)

第四節『修辞学・文学講義』と同感

一、はじめに

二、『修辞学・文学講義』の特色と歴史的位置付け

三、文体の一般論

四、論説の種類と目的——文体の各論

五、論説の有効性と状況への着目

六、弁論文——doctrineとsituationの關係の一例として

七、感情のコミュニケーションにおける同感——道德の世界との相違

第三章 スミス同感論の構造

第四章 スミス正義論と自然法学への展開

おわりに

(以上本号)

第四節『修辞学・文学講義』と同感

一、はじめに

前節ではスミスの『外部感覚論』を対象として認識論に関する議論を取り上げ、そこにおける論理が人—物關係にかかわる論理であり、人—人關係を対象とした道德論における同感論とは異なることを示した。認識論における習慣や慣習に関する議論と、道德論における同感論や同感判断の中から生ずる社会規範に関する議論とは、類似とみなされがち

ではあるが、スミスにおいてそれらは構造を異にすることを指摘した。また先行者や同時代人とは大きく異なり、スミスは認識論を取り除いた上で自らの道德の世界を構想し、そのことがスミスの道德論の性格を強く規定していることを指摘した。本節ではスミス『修辞学・文学講義』の内容を概観することを通じて、次のことを考える。

第一に、『修辞学・文学講義』においては同感というタームが用いられているが、そこにおける同感とは、『道德感情論』で展開されている道德の世界における主体間の交通の論理としての同感とはその構造を異にすることを示し、そのことから逆に同感論の特徴を明らかにする。『修辞学・文学講義』においては、『道德感情論』と同様に同感をキータームとして、感情の伝達という観点から、従来のレトリック論の批判的検討と新たなレトリック論の提唱がなされている。しかし、そこでの同感はいくまでもメッセージの送り手から受け手への伝達という観点からのみ論じられており、同感の作用は一方的なものである。『修辞学・文学講義』において同感過程は、『道德感情論』における同感過程とは違い、判断者と被判断者との間の双方向的な呼応関係とそれに起因する緊張関係のなかで展開するものとしては想定されていない。以下では、スミスの道德の世界とそれを構成する同感の構造・特色を明らかにするために、両著作における同感過程の構造の違いを明確に区別する。

第二に、スミスの体系全体に共通の方法論の萌芽ともいふべきものを指摘する。以下で詳しく見るように、文体に関する様々な学説とそれが成立した当時の社会状況・人間関係のあり方などを論ずる中で、スミスは学説 (doctrine) や様々な論説とそれがおかれた状況 (situation) との間の関係についての着想をえ、それを広い意味での社会に関する議論の原型として応用した。その原型は、後の様々な領域における議論、たとえば制度とそれがおかれた状況に関する議論へと応用され、状況の分析から出発しつつも単に状況の分析にはとどまらない視点のもとで展開されていた。すなわち以下にみるようにスミスは、文体に関する学説の有効性が、それがおかれた状況に依存すると考え、そのため各々

の学説がおかれた状況を分析する。また同時に他の学説についてもそれぞれのおかれた状況を分析する。そのような複数の状況の分析を比較対照する中で、それらの学説が有効となるための要素を探究する。その結果、学説が状況と無関係に有効性をもつものでもなく、逆に状況の中に埋没するものでもなく、学説と状況を切り離した上で両者の関係を考察することが可能になった。このような、いわばテキストをコンテキストの中で分析することを通じて、逆にコンテキストとの関係を相対化し、それ自体を問題化していくという態度は、具体的には次章以下で述べるように、スミスの道徳哲学（法学・政治学などの社会科学をも含む）に共通してみられるものと考えることが出来る。また、このような考察から、スミスの思想全体におけるレトリック論の位置付けも明らかにする。

以上の点を検討するために、『修辞学・文学講義』を概観する。

二、『修辞学・文学講義』の特色と歴史的 position

周知のように、アダム・スミスが自らの手で刊行した著書は『道徳感情論』と『国富論』の二冊のみであり、これに死後遺稿の処理をまかされた遺産執行人が出版した『哲学論文集』を含めても独立した著書は三冊のみである。本節が対象としている『修辞学・文学講義』は、現在全集に収められている『法学講義』とともに、スミスの講義を聴講していた学生のノートである。『修辞学・文学講義』⁽¹⁾として現在残されている講義ノートはスミスが一七六二年から六三年にかけてグラスゴー大学で行った講義の記録である。

スミスは、オックスフォード大学への留学から失意の帰郷後、一七四八年から五一年にかけてヘンリー・ヒューム（後のケイムズ卿）の支援を受け、公開講座をエディンバラで行ない、好評を博していた。この好評によりスミスは、一七

五一年にはグラスゴー大学の論理学の教授(翌年には道德哲学)に迎えらる。そこでの講義の内容は、エディンバラでの公開講義と重なるものであったことが確認⁽³⁾されている。したがって、本節の対象である『修辞学・文学講義』は、スミスの学問的出発の時点での問題関心を色濃く反映しており、彼の道德哲学あるいは経済学における、社会と個人の関係を論ずる際の着想を探るための格好の素材と言い得る。また、一七五二年より道德哲学の教授として講義を始めたスミスは、『道德哲学』の講義と平行して、『修辞学・文学講義』を一七六三年まで続けていた⁽⁴⁾。したがって、この点からも『修辞学・文学講義』で展開されているテーマは、スミスの学問的出発点での問題関心だけではなく、その後の継続的な考察の対象であった。

さて言うまでもなく、レトリック論はそれ自体非常に長く豊かな歴史をもつものである。ここでは後論に關係する限りで、その歴史の中でスミスの『修辞学・文学講義』が持つ特徴について、現代的観点から従来のレトリック論を再検討しているW・S・ハウエルの著作によりながら、簡単に概観する。ハウエルは、「イギリスの十八世紀レトリック研究家は、一九五八年(スミスの『修辞学・文学講義』が刊行された年、筆者註)以前はイギリスの十八世紀のレトリック理論にもたらされたドラステイックな変化をアダム・スミスと関連づけることはできなかった⁽⁶⁾」と述べ、レトリック理論の歴史に占めるスミスの重要さを示唆するとともに、十八世紀という時代状況及びスコットランド啓蒙の盛期という社会状況の中でのレトリック論が占める比重の大きさをも示している。ハウエルはまた次のように述べている。

「現代においては、レトリック論は第一級の精神にとつてふさわしい研究であるとは考えられないほど、その尊敬を失っている。現代のスミスの称賛者たちも、しばしば考慮の末、この講義を呼び変えずにはいられないと感じている⁽⁷⁾」
 ほどである。しかしながら、現代における反対意見にもかかわらず、レトリック史家は、次の点を認めるにちがいない。
 すなわち、十八世紀においては、尊敬に値し、しかも学問的なレトリックの伝統が隆盛であったこと、スミスはこのよ

うな伝統の中に自らを位置付けただけではなく、そのような伝統を彼の時代と共働させようとする努力をしていた。この意味で、以下に見るような『修辭学・文学講義』の中で示されている反レトリック的要素は、むしろ彼が反レトリックの要素を当時においてはまさにレトリックの本質であると考えていたことに起因する。⁽⁸⁾

このようにハウエルは、レトリック論の歴史における十八世紀という時代の重要性及び十八世紀におけるレトリック論の重要性を指摘すると同時に、そこにおけるスミス『修辭学・文学講義』の重要性を指摘している。具体的にはスミスのレトリック論の独自性として次の二点を挙げている。第一には、レトリックを文学のすべての分野——歴史的・詩的・講述的（学問的）・弁論的論説——に共通の理論であると考えた点。⁽¹⁰⁾第二には、先駆の大理論家たち——アリストテレス、クインティリアヌス、ラムス——の学説を崇拜して受け入れるのではなく、それら先行のレトリック理論から彼の新しい時代にふさわしいと考えるものを選択し、彼がそうすべきであると見なすときにはいつでも自らの新しい洞察を付け加えた点である。⁽¹¹⁾その結果彼のレトリック理論はフランスの先行者たちよりも、より包括的で独自のものとなりえた。つまりフランスの先行者たちがレトリック論において文章を説得という観点でのみとらえていたのに対してスミスは、レトリック論を観念を生み出すすべての論説の構造と機能についての学問とみなした。「論説は、話し手から聞き手へ、観念や意向を伝えるために設けられるものである⁽¹²⁾」と考えた。それにより、レトリック論において、先行者たちが中心主題とした説得という要因を取り込んだうえで、さらにコミュニケーションをレトリック論の包括的なテーマとすることができた。⁽¹³⁾

以上によりハウエルは、スミスのレトリック論は、過去の体系の伝統を踏まえたうえで、それを彼の時代にそして将来に役立て、彼自身の新しいレトリック論を形成したとして評価している。⁽¹⁴⁾

すなわち、スミスは、レトリック論において言語を介したコミュニケーションという包括的テーマを定めることによ

り、詩や小説などの書かれた文章だけでなく、法廷弁論や議會弁論などの口頭で発表される文章をもその対象とし、内容の上からは、大衆向けの文章だけでなく歴史記述や学問的な論説もまたその対象とした。また、後に詳しく述べるように、様々な論説をそれ自体独立のものとして論ずるのではなく、それが書かれたあるいは弁じられた当時の社会的状況や、対象としている人間関係などの点をふくめて論ずることになった。つまり、言語を介した感情 (sentiment) のコミュニケーションというテーマを掲げることにより、言語を介した人間同士のかかわり、そこから生ずる人間関係をレトリック論の射程とした。というよりむしろそれを中心課題として、『修辞学・文学講義』を展開した。そして冒頭でも述べたように、その感情のコミュニケーションというテーマを論ずる際のキータームが、同感であった。

三、文体の一般論

『修辞学・文学講義』におけるスミスのテーマが、言語を介したコミュニケーション全般であり、社会的な関係も含めてそこから生ずる人間関係であることは前節で述べたとおりであるが、スミスはこれを文体の一般論として具体化している。すなわち、英語という言葉における透明な文章、つまり書き手や話し手の感情 (sentiment) が、読み手や聞き手にそのまま歪まずに伝わる文章を書くためには、どのような点につき考察すべきか、という問題を立て、それに答えることにより議論を展開している。まずスミスは予備的考察として、英語の起源やその進歩の過程における特殊性につき論じ、その特殊性により英語がもつに至った欠点と、それらがどの程度までまたいかなる方法によって矯正されたかという点⁽¹⁵⁾について、具体的には発音・強勢・語順・格変化などの点について論じている。そしてこの予備的考察の後に文体そのものを考察し、それをふまえて、文体についての一般論をおおむね以下のように定式化している。「話⁽¹⁶⁾

し手の感情 (sentiment) がきちんと明確に明瞭に巧みに表現されており、かつ話し手が同感 (sympathy) により、聞き手に伝えようとしている情念や感動が、明瞭に巧みに打ち出されているなら、その表現は、言語が与えうるすべての力と美を有している⁽¹⁸⁾。スミスは、「明快な文体」を言語を介したコミュニケーションの唯一適切な形態と考え、そのような観点から従来のレトリック論に対して批判を加えている。

すなわちスミスは、言葉の彩 (tropes)・言い回し (figures) とそれらにまつわる規則を重視する従来のレトリック論を、次のように批判する。言葉の彩や言い回しは、「一般には言語に美しさと優雅さの主なものを与えると考えられている」が、実際にはそうではない。実際には言語の進歩の過程で「人々は言語を規制する規則を作ろうと考え」、ギリシア人やローマ人もまた「文法を作ったが、彼らの言語は極めて複雑な形態をもっていたので」、「それらの規則を可能なすべての場合に適用することは容易ではなかった。また、それらの規則も、それほど良いでなければならなかった」。したがって、「これらの規則には還元しえない、たくさんの表現が生じた。しかしながら、彼らはこれらの表現を、率直に規則の例外だとは認めずに、古い規則を固守した。そして、自分たちの態度をより正当に見せるため、これらの表現に対し、言葉の彩・言い回しという名称を与えた」。例えば、「命令文や疑問文というのは、各文には、主語・動詞・目的語などが一定の順序に並ばなければならない、という一般規則に明らかに矛盾するが、それらを例外とは考えずに、言い回しと考⁽¹⁹⁾えた」。それゆえに、「クインティリアヌスやキケロの文修飾 (figures sententiarum) の冒頭には命令文や疑問文が登場するのである」。そしてこれまでのレトリック論者たちは、「これらの言葉の彩・言い回しの中にこそ、言語のすべての美、一切の高貴さ、壮大さ、高尚な表現、情熱がこもり、愛情の深い、心を打つすべての表現が見いだされるべきだと我々に教えている⁽²⁰⁾」と考えた。要するに言葉の彩・言い回しは、単にできの悪い規則の例外にすぎないのであり、言語の持つ美などとは無関係だと考えたのである。

「明快な文体」を標榜するスミスにとって、このような言葉の彩・言い回しを中心にして展開されている従来のレトリック論が批判の対象となるのは当然であるが、スミスは必ずしもこれらの技巧をすべて否定し拒否しているわけではない。「それらがたまたまその感情 (Sentiment) に適正で自然な形であるなら、文章の美に貢献するし、またし得る」。つまり、「言い回しは、文章の美しさに何かを付け加えるのではなく」、「普通の話し方より、文彩などを用いて語る方が、より適切である場合にのみ、これらの文彩や言い回しが用いられるべきであり、それ以外には使うべきではない」。これら言い回しなどは、それ自体何らかの固有の価値をもっているのではない。言い換えるなら、これら文彩を用いることは、「作者の考えている意味を普通の文体よりも、より適確に表現する場合にのみ、時折、適正であるような第二義的な手段であるに過ぎない」⁽²¹⁾。

しかしながらこれまでのレトリック論者はこのことを見誤り、「すばらしい作家たちが頻繁に一般規則から逸脱し、いわゆる文彩を取り入れたり、非常に力強い美しい文章の中に、頻繁にこれらの文彩があることから、愚かにも、それらの文章に美を与えているのは文彩であると結論を下してしまった」。そのため「様々な言い回しとその第一次・第二次分類などの研究が行われ、そこから、古今のレトリックの体系が形成されてきた」。したがって、スミスにとってはこのようなレトリックの体系は「総じてばかばかしく、全く無益」⁽²²⁾なのであった。

このように話し手の意図・感情を正確に効果的に伝えるというレトリック論の本旨を忘れ、いわば形骸化した従来のレトリック論を徹底的に批判した上で、スミスは文体の美しさ・完璧さについても、画一的に、状況から切り離して決まるものでは決していないことを強調する。つまり、「文体にも多様性があつてしかるべきであり」、それぞれにふさわしい文体が、作者の目的・その他によって考えられる⁽²³⁾。作者の意図している目的（例えば説得なのか、知識の伝達なのかなど）や作者の性格などによって、それぞれのふさわしい文体があり、ある特定の文体をこれら様々な状況から切り離

して、美しい・完璧な文体などということはできないのである。逆に言うなら、状況から切り離れた文体それ自体の美しさを例えば、言葉の彩・言い回しなどを基準にして論ずることは不可能であるということになる。

以上まとめると、他人との言葉によるコミュニケーションは、同感を通じて行われるのであり、レトリック論とはこの言語を介したコミュニケーションの全ての領域をその対象とするものである。そしてその際の文体の良し悪し、美しき・完璧さは、古来のレトリック論者が教えているような、言葉の彩・言い回しが含まれているかどうかによるのではない。それは書き手や話し手が、読み手や聞き手に、同感 (sympathy) を通じて、伝え (communicate) ようとしている感情 (sentiment) が、適切に・明確に表現されているかどうかに依存しているのである。したがって、文体の美しき・完璧さは、相手に自らの感情がうまく伝わるように、扱う対象・目的そして話し手・聞き手の性格、さらには彼らのおかれている社会状況によって決定されるものである。だから、これらさまざまな状況から切り離して、抽象的に非状況的に論じ得るものでもないし、また言葉の彩などのいわゆる修辭が含まれているか否かという基準で決まるものでは決してない。また、勿論そのような技巧の非状況的な分類などは、およそ無意味なものということになる。

以上のような文体に関する一般論に基づいて、スミスは彼にとつての現代においては平明・簡潔な文体がよいと論じている。この点と今述べた一般論との関係について論ずる前に、文体の各論とでも呼びうる部分につき、見ておくことにする。その中でスミスは冒頭で指摘した二点について具体的に展開している。

四、論説の種類と目的——文体の各論

スミスはまず論説を次の三つの種類に分け、それぞれの目的の違い、そしてその目的の違いから生ずる文体の違いに

つき論じている。

① 説話文 (narrative discourse) すなわち主に歴史に関する論説。

② 講述文 (diactive discourse) すなわち学問的な論説。物理学・天文学などの現在で言うなら自然科学に当たるものをはじめとして、哲学・形而上学さらに芸術論などを含む。

③ 弁論文 (rhetorical discourse) アリストテレスをはじめ、古来のレトリック論が対象としてきたもの。その中をさらに、ある特定の人々や地域社会や行動を称賛したり非難したりすることにより、人々をある特定の行為に赴かせたり、そこから退けたりする「演示型弁論」、国家の重要事項についての会議・集会などにおいて用いられる「討議型弁論」、法廷における議事において用いられる「法廷弁論」の三種類に分けている。

それぞれの論説がもつ目的の違いについては、次のように述べている。「説話文の目的は、事実を述べることであり、それによつて、講述文・弁論文はある命題を証明しようとすることを目的⁽²⁴⁾とする。『講述文は、論題に関する両面の議論を正しい姿において、我々の眼前に示すことを意図し、各々の論拠 (argument) に適切な程度に影響力を持たせ、議論それ自体のもつ説得力を超えてまで説得しようとはしない』⁽²⁵⁾。他方弁論文は、これがまさに伝統的なレトリック論の対象であったことから察せられるとおり、「あらゆる手段により、説得しようと努めるものであるため、片方の議論を拡大し、他方のそれを縮小し、あるいは全く触れないこともある」⁽²⁶⁾。つまり、弁論文においては「説得性が第一の企図 (design) であり、教示 (instruction) は、その説得性に従属する範囲でのみ考慮される」ことになる⁽²⁷⁾。反対に、講述文においては、「教示が第一の企図であり、説得はたんに議論の範囲でのみ行われる」⁽²⁸⁾。換言するなら、講述文とは、ある学問の内容や体系を伝えることが目的であり、弁論文は、ある論点について、相手を納得させることを目的とするという。

スミスはこのように論説を分類した後、それらにつき各々以下の観点から考察を加えている。①各々の型の論説にとって、どのような事実が叙述するにふさわしいか。②それをどのように（例えば、間接話法か直接話法かなど）叙述すべきか。③どのように配列すべきか。④どのような文体で表現すべきか。⑤どのような著作家たちが、各々の分野において成功しているか。

その考察にあたつては、抽象的な体系論を展開することを目的として、状況と無関係に考察するのではなく、それぞれの論説の目的やおかれていた状況を考察することにより、書き手・話し手の感情（sentiment）が十分伝わるには、どうしたらよいのかという点をめぐって、具体的に考察を行っている。

さて、この論説の分類・レトリック論の対象の設定に関して、前出のハウエルは、特に二番目の講述文をとりあげ、当時のロジックにおける動向（従来のロジックに対する新しいロジックの提唱）と関連させて、スミスの議論を高く評価している。⁽²⁹⁾

スミスの講述文に関する議論は次のとおりである。スミスは講述文として具体的には学問的な論説を想定している。そこにおいては教示が第一義的な企図であり、説得は第二義的なものであると考えていた点は前述のとおりである。スミスはさらに、講述文とはある体系を説明する文章であると述べ、それには次の二つの方法があるとして紹介している。第一は、「一つかあるいはほんのわずかの数の原理を定め、それによつて幾つかのルールや現象を説明し、それぞれを自然な秩序になるように結び付ける」という方法であり、第二は「初めに何を説明するつもりであるかを述べ、一段階づつ前進するたびに、先に述べた諸原理と異なるかあるいは同一の、一つの原理を述べ⁽³⁰⁾る」という方法である。前者をニュートンの方法、後者をアリストテレス的方法と呼ぶ。

学問的論説において、この二つの方法のうちどちらを用いてもかまわないが、前者の方法の方が後者の方法よりも「疑

いもなく、最も哲学的 (philosophical) な方法であり、道德哲学・自然哲学などあらゆる学問においてはるかに巧妙であり、したがって魅力的である」。なぜなら、「我々が全く説明不可能と考えていた諸現象が、ある原理 (たいていは周知の原理) からすべて演繹され、すべて一つの鎖でつながれて、一貫しているのを見るとき、我々は喜びを感じる。そしてそれは、すべての現象が個々ばらばらに、相互の関連なしに説明されるような、一貫性のない方から感ずる喜びよりも、はるかに大きな喜びである」と述べ、ニュートンの方法を推奨している。

そしてこのニュートンの方法の典型として、デカルトを挙げ、以下のように述べている。「デカルトの哲学は、たとえそれが真実を語っていないかもしれないが、また当時よりもより啓蒙された時代に生き、それらの事柄についてより研究が進んでいる我々にとつて、極めて疑わしいものに見えるとしても、それにもかかわらず、当時のヨーロッパのすべての学者たちから大いに歓迎されたことは驚くには及ばないのである」⁽³¹⁾。この指摘は、スミスの学問観を非常によく表すものとして興味深い。スミスはそれが絶対的真理を発見しうるからという理由で、ニュートンの方法を推奨しているのではない。スミスは、講述文の目的である教示すなわち知識の伝達がどのように達成されるかという点を考察に入れることにより、レトリック論に新しい領域を拓くとともに、レトリック論がもつ具体的な学問の方法としてのロジックとの新しい関係をも示唆している。これはまた、狭義の自然科学とも狭義の倫理学とも異なり、人間関係の構造への考察を不可欠とする彼の道德哲学へのとり組みをも示唆するものといえる。

以上のようなスミスの講述文に関する議論、またそもそもこれをレトリック論の対象とすること自体について、ハウエルは以下のように高く評価する。「スミスは、彼のレトリック論において、学問的知識を言葉により提示する際の指標となる原則と方法を古いロジックから借用した」。そしてそのことによりスミスはレトリック論に知識の伝達という機能を持たせて、構築した。そして、「レトリックは、この種の課題に応える力を昔からずっともっていた」⁽³²⁾。しかしな

がら、このことは「ロジックが学問的な事柄のコミュニケーションに関する理論を支配し、他方でレトリックが古代の儀式についてしか目を向けていない間は、不可能であった」。当時の新しいロジックが自らの対象を「学問的探究の方法に限定することを主張する一方」⁽³³⁾で、スミスは「レトリックの対象を古代の儀式に関するものを超えて、とらえることにより、新しいロジックが支配しようとしなかった事柄について、レトリックがカヴァーしうることを主張」⁽³⁴⁾したのだとハウエルは述べ、学問的探究の方法論としてのロジックとその成果を一般の人に伝達する手段としてのレトリックという位置付けの中でスミスのレトリック論を高く評価している。

このような観点を理解するためにはスミスの学問的探求についての見解、さらに学問的探求の方法としてのロジックそのものについての見解を検討しなければならない。また、このスミスの『修辞学・文学講義』がもともととは論理学講義として行われていたという事情を⁽³⁵⁾考え合わせるなら、ロジックとレトリックの関係、スミスにおけるレトリックの位置付けという問題は、それ自体重要な問題である。以下ではこのように大きな問題を解くための一つの鍵として、スミスが論理学の講義でレトリック論を論じた事の意味を考える。

五、論説の有効性と状況への着目

スミスはレトリック論の対象を、狭い意味でのレトリックから、言語を媒介とするコミュニケーション全体に広げた。したがって、スミス思想全体においてレトリック論がどのような位置にあるのかまた他の分野とどのような関係にあるかという点につき検討しなければならない。以下では、グラスゴー版全集に収められた『修辞学・文学講義』の編集者であるJ・M・ロージアンの見解を批判的に検討することを通じて、レトリック論の位置づけを考える。

ロージアンは、『修辞学・文学講義』に付した長い序文の中で、この講義が論理学の講義として行われたというミラーの報告に注目して、次のように述べている。「スミスは熟慮のうえで、学生達の興味に対して、知的な面でのアピールよりはむしろ情緒的な面でのアピールを目指しており、学生達の推論能力 (power of reasoning) よりむしろ感性及び美的感覚 (aesthetic sense) を刺激しようと試みたことは明らかである」⁽³⁷⁾。さらに、ロージアンは、スミスの文学的関心の高さを指摘し、この『修辞学・文学講義』を文芸批評という形で、哲学・経済学・法学と並ぶ第四の文学的世界として、位置付けている。そしてその文芸評論としての文学的世界は、論理的な世界とは別個に、独立した世界として成立するとして、文学的世界における「感性及び美的感覚」と論理的世界における「推論能力」とを対比している。

しかしながらこのようなロージアンの見解には、これまで見てきた『修辞学・文学講義』の内容から考えるなら、疑問が感じられる。すなわち、『修辞学・文学講義』の議論は、文修飾などのいわゆるレトリックの技巧及びそれらの分類についてのものではないことは言うまでもない。前にみたようにスミスは、レトリックの目的である文体の美・完璧さは、話し手の感情 (sentiment) が、同感を通じて、聞き手に正確に伝わることにあると考え、そのような観点から従来の形骸化したレトリックを厳しく批判していた。さらに文体論においてスミスは、文体の美・完璧さは、状況を離れて、それ自体抽象的に体系的に論ずることはできず、文章が作成された状況に依存して決まるものと考え、そのような状況を丹念に検討している。このようなレトリック論は、スミスにおいて、他の領域と区別される文学への造詣の深さや関心の高さの現れとしてではなく、文学も含む言語を介したコミュニケーションのあり方への関心として位置づけられるべきである。そしてそこでの基本的な着想は、レトリック論以外の領域での様々な議論の中で生かされ展開されていると言いうる。スミスは『修辞学・文学講義』において、ある学説とそれがおかれた状況の関係を分析しているが、そのような状況への着目とその分析は、ロージアンが対立的にとらえている他の著作のなかにも一貫してみられるもの

である。

例えば周知のように『国富論』においてスミスは重商主義とその諸政策を批判しているが、それは論者によるなら以下のような考察を経たうえでの批判であった。つまり、重商主義は「恣意的にできたものでは決してなく、人々の同感とともに、その一つ一つがそれなりの根拠をもってあらわれたものである、という確信に立ち、そうした見解がでてくる外的な諸事情を——個々的な事情としてではなく、機構として、しかもニュートンの方法を採用して、分業論を基礎に——資本の蓄積³⁸」投下の理論を漸次具体化しながら、一步一步明らかにしている³⁹。また、『道德感情論』において人間の性質を論ずる際にも、人間の「内面の精緻な叙述よりは当該人間をして、そういう感情ないしは意見をいだかしむるに至った外的事情の要を得た簡潔な描写³⁹」を中心に行っている。そしてこのような「人間の内景そのものではなく、人間をして特定の行動をとらしめる背景としての外的事情や機構⁴⁰」すなわち、人間がおかれているさまざまな状況を丹念に描くことにより、たとえば、重商主義政策が誤りである真の理由、そして訂正されるべきなのはどこであるのかなどの点につき明らかにするという作業を一貫して行っている。

この点はスミスの学問観を見るなら、一層明らかである。スミスがデカルト哲学に対して取った態度については前項で触れたが、そこから分かるように、スミスは、学説の流れを絶対的な真理を基準とした誤謬の積み重ねとしてとらえるのではなく、次々と登場してくる諸体系が各々なぜ後継の体系に道を譲るまでに衰退したのかを追及することにより、学問的研究を指導し導く原理は何か、ということを探究している。つまりスミスは、様々な学説史を描くことにより、それらの「不合理さや蓋然性、真理と現実への一致もしくは矛盾について考察するのではなく⁴¹」、それらの学説が成立して、人々に受け入れられて行く状況を描くことにより、学問を指導し導くものは何であるか、どうすれば学問は進歩するのか、という点につき考察している。

以上より、『修辞学・文学講義』で展開されているレトリック論は、倫理学・経済学・法学と並ぶ第四の領域として、他の領域と区別されつけ加えられるべき文学の世界としてではなく、むしろ学問の出発点として位置づけられるものであり、そこからその後の様々な領域における分析枠組みを構築する際の基本的な着想を読みとるべきではないか。もちろんこのことが、スミスの文学に対する造詣の深さや関心の高さそれ自体を否定するものではないことは言うまでもないことである。スミスは、レトリック論の中で言語を介したコミュニケーションに注目することにより、ある方法的枠組み——状況を丹念に描くと同時に状況に注目することにより、逆説的ではあるが、状況と学説を切り離し、学説をドクマとみなすことを拒否する——についての基本的な着想を得、その重要性を提示するための題材を文体論に求めた。すなわち、文体論という状況依存性の高い分野を対象とすることにより、状況に関するいわば歴史的な考察に目を開かれた。さらにその成果をもとに、逆に状況と学説とを独立的に、無関係にという意味ではなく、相互の関係を論ずることが可能になった。すなわち、そのような論説と状況の関係を考察する状況的思惟様式⁽⁴²⁾の格好の題材である文体論を検討する中で、自分の学問体系全体に一貫する方法的枠組み⁽⁴³⁾を形成し展開したのではないか。

それだからこそスミスはこの『修辞学・文学講義』の内容を自らの学問的出发点であるエディンバラ公開講義で取り上げ、これをその後『道德感情論』を執筆した後も、一七五一年にはグラスゴー大学論理学教授として、一七五二年以降は道德哲学教授としても、正規の授業と平行させつつ、繰り返し行っただけではないか。以上のような観点からするなら、前述のロージアンの見解は『修辞学・文学講義』の内容を誤解するだけでなく、スミスの学問体系の全体像をも歪めてしまうのである。

以上、ロージアンの見解を手掛かりとして、スミスにおける『修辞学・文学講義』の意味を考えたが、そこにおいてスミスが展開しようとした方法、即ち状況的な方法の特徴を明らかにするために、以下では弁論文に関する議論を取り

説
上げることにする。

論

六、弁論文——doctrine と situation の関係の一例として

前項で触れたスミスの方法の特徴、即ちたとえその学説・見解がスミスの立場からすると誤ったものであっても、その見解・学説が成立するに至った外的状況を綿密に描くことにより、その誤りの原因・矯正されるべきはどの点なのかを明らかにし、そのことにより一つの学説がドグマ化するのを防ぐという手順が、分かりやすい形で展開されている、というよりむしろこの手順に関する着眼と確信の源であつたとも思われるのが弁論文に関するスミスの議論である。

弁論文とはスミスによるなら、説得を第一の企図とする論説で、その中には、演示的弁論・討議的弁論・司法的弁論の三種類がある。古典的レトリック論ではまさにこれらを対象としてきた。これらの論説においても、書き手のあるいは話し手の感情を伝えるという目的（弁論文の場合は、相手を説得する）が、同感によつて達成されるという点は文体の一般論と同様である。一般論において、文体の美しさ完璧さが依存しているとされた様々な状況は、弁論文においては、その弁論が行われた当時の社会状況として、具体的に説明されている。

スミスはまずデモステネスとキケロ⁽⁴⁴⁾を取り上げる。彼らは弁論文の文体それ自体を見るなら一見して全く傾向が違ふ。しかしスミスはこの二人をとともに優れたレトリック論者として評価し、その上で二人の背景となつてゐるアテネ及びローマの状況を考察している。その状況とは、二人の生きていたアテネ・ローマにおける相異なつた人間関係・社会関係である。⁽⁴⁵⁾

両国においては同様に「役人職が公開され、全人民に解放された」が、それがもたらす結果はアテネとローマとは

全く違っていた。まずアテネでは「国家の領土も役人職の權威も、ともにそれほどのものでなかった。役人になったものはそれほどの巨富を手に入れることはなかった。したがって、役人もまた、人民の歎心をおうとすることもなかった。こうして役人の地位は、それに値するだけの功績をもちかつ同胞市民たちから好意を受ける人であれば、だれにでも公開されるという状態であり続けた。⁽⁴⁶⁾ また「財産の不平等もあまり大きくなく」、「最も貧しい市民でも、公益によって、最も富める人々と同じくらいの財産を作ることができた」ので、「市民の間に分裂を招来することはなかった」⁽⁴⁷⁾。つまり、アテネにおいては、「市民の階級はただひとつしかなかった」⁽⁴⁸⁾のであり、「最高の市民も市民以上の存在ではなかったし、最低の市民も同一の特権をもっていた」のである。

これに対して、ローマにおいては「すべての役人職に偉大な権力と巨大な富が随伴していた」ため、役人職の解放は、アテネとは逆に「平等を破壊することになった」。国民は「役人職につくか、または、つく見込みのある人々」からなる「上流派」(Optimates)と「役人職につく望みのない」「きわめて貧しい人々」からなる「庶民派」(Populares)という二派に分裂したからである。そして庶民派に属する人々は「選挙の際に候補者が惜しみ無く使う運動費用に専ら頼って生計を立てていたため」、選挙の際の買収などの手段を「防ごうとしても無駄であった」。また庶民派の人々は、「国による、無料もしくは低料金の食料や、生活必需品の分配に」頼っていたため、この二派への分裂は是正されず、「最大の富と権力を有する人々と、最低の貧困にあつて他者への依存により暮らす人々」という形で固定化していた。さらにローマにおいては、ローマ初期の騎士階級を除けば、これら二つの階級の間に「中間の派」⁽⁴⁹⁾は存在しなかった。つまり、アテネには人々の階層 (order) は一つしかなかったのに対して、ローマには上級と庶民という二つの階層があった。⁽⁵⁰⁾

また、人々から好意をもたれる人物像に関しての評価も、アテネとローマでは異なっている。アテネでは普通の市民

よりいづらか華美な服装で現れるなど「どんな種類の驕りでもこれを誇示するなら、人々の嫉視を浴びた」のである。これに對して、ローマにおいてはどんな豪華や華美であっても、人々の嫉視の的になることはなかった。そしてローマにおいては上級の人々は自らを庶民よりも高いものであると見なし、庶民を見下していた。また庶民のほうもまた、そのようなにして上級の人々が権力を増大させて行くことについて、少しも反対しなかった。⁽⁵¹⁾そしてアテネでは「市民はすべて同等の地盤のうえに立っていた (all on equal footing) ので」、「お互いに最大の親密さをもつて、ともに生活しともに語り合った」。またプラトンの『對話編』において、「国家における位階や権力が全く相隔たっている人々が、非常に大きな自由と親密さをもつて語り合っている」ことから分かるように、「財産や職業の違ひは、行動の気楽さや親密さを妨げることはなかった」。これに對しローマでは上流の人々は庶民に對して自分たちの行動の優越さを誇示しようとして、「おおげさな裝飾の多い用語を用い」、またキケロの著作に見られるように、上流の人々の間では「最も丁重にお互いに大きな敬意を払い、非常に儀礼的にお互いを称賛し合」つており、そこにはプラトンの著作には見られない「丁重な文体、世辞追従の言葉」がたくさん盛り込まれている。⁽⁵²⁾

まとめるなら、アテネにおいて「話し手は、自分と同等の聞き手に向かつて話す態度」つまり、「自由、気楽さ、親密さ」をもつて語った。他方ローマにおいては、「話し手は、聞き手よりも、地位も権威も高い存在と考えられ」、したがって「威厳と大仰さと権威を備えた態度で」語ったのであった。⁽⁵³⁾

以上のような、アテネ・ローマそれぞれの国情の違いを考えるなら、「デモステネスとキケロの文体の違いは非常に大きいが、各々の国情に適していたことがわかる」とスミスは論じている。すなわち、デモステネスは「同等の者に語りかける気楽さ」をもつて語り、キケロは「優者の威厳と権威をもつて語った」。そのためキケロはまた「非常に瑣末な機会においても、自己の文体に威厳と権威を与える要素は何でも取り入れようと常に努力し」「文彩をしきりに用いた」⁽⁵⁴⁾

のであった。

これらの点は、法廷弁論において、さらに明らかである。デモステネスは、平易、親密な文章で、自らの主張を素直に、次々と述べる。他方キケロは、弁論の細部にわたって、数多くの文彩、言葉の彩を取り入れ、全体の構成についても、当時のレトリック論に忠実にくみ立て、聴衆の情動を動かすことを目的とする「結論」⁽³⁵⁾という部分を取り入れている。さらに言うならキケロは、当面の訴訟事件には不適当な場面であつても、レトリック論に基づいた区分に固執しているようであり、また時には事件とは直接関係のない余談を取り入れているのである。デモステネスのような自由闊達な論法の弁論家には、このようなものは不要であつた。キケロの弁論は、人々の「憐憫や愛」⁽⁵⁶⁾を引き付け、デモステネスの弁論は、人々の「義憤」を引き起こすのに向いている。

この全く異なる二人の文体が各々の国の状況や人々の気質に非常によく合致しており、それゆえ二人が弁論家として名声を博したということは前に述べたとおりである。つまり彼らの弁論に関する考え方すなわち学説 (doctrine) は、それぞれの社会が内包している人間関係のあり方という状況 (situation) に合致していた。

以上弁論文に関するスミスの議論を概観した。ここでもやはりスミスは、文体の美・完璧さは、状況を抜きにして抽象的に述べることはできず、それは、その文章が作成された状況に依存して決まることを具体的に述べていた。このことは一方でスミスが文体の一般論においてキケロの弁論を批判していたのにもかかわらず、他方で彼の弁論が一定の状況を背景とし、それに適合していることを確認し、そのうえで彼が弁論家として名声を博した理由を探っていることから明らかである。そして、このことはまた、スミスが、文体の美・完璧さは、「話し手の感情 (sentiment) が、きちんと、明確に、明瞭に、巧みに表現されており、かつ話し手が、同感 (sympathy) ⁽⁵⁷⁾を通じて聞き手に伝えようとしている情念・感動が、明瞭に巧みに打ち出されている」かどうかによって決まるのだと考えていたことからすると、当然

の結論とも言える。さらにスミスにとって、ある人間が他人に、自分の感情を伝え理解させ納得させたり説得したりするのは、相手の同感を得ることを通じて行われるものであった。それゆえ、スミスにとつては、どういう目的で、何について、どのように話すのかということをも具体的に考慮せずに、つまり状況とは無関係に、文体の美・完璧さを論ずることは不可能であった。

したがって、文体の美・完璧さについての理論を体系化することはできないのであるが、文体の美・完璧さは、その原理においては実に簡単なことであるとスミスは強調している。⁽⁵⁸⁾そしてこの原理というのが、作者の感情が相手に正確に伝わるように表現する、ということであるのは、もはや言うまでもないことである。以上スミスの弁論文に関する議論を通じて、彼の文体の一般論、またレトリック論の内容を確認した。次に項を改めて、もう一度『修辞学・文学講義』でのスミスの主張をまとめる意味で、『同感による感情 (sentiment) のコミュニケーション』の世界につき、簡単にしておくとともに、道徳の世界との違いについても考えることにする。

七、感情のコミュニケーションにおける同感

——道徳の世界との相違

これまで述べてきたように、スミスはレトリック論のテーマを言語を介したコミュニケーションとしていたが、その際のキータームは同感であった。すなわち、スミスは、文体の美や完璧さは、話し手・書き手の感情 (sentiment) が明確に表現され、同感により相手に伝えようとしている情念や感動が明瞭に打ち出されていることにかかっていると考えていた。そして他人との言語を介したコミュニケーションにおいては、同感を獲得することを通じてそれぞれのメッ

セージの目的（話し手・書き手の sentiment）が果たされることになる。作者の感情（⁽⁵⁹⁾sentiment）を伝達（communicate）し、さらに弁論文であれば相手の説得、講述文であれば納得・教示するのは同感を通じてだとされている。言い換えるならば、相手と一定の同感関係（同感に基づく関係）があつてはじめて、相手に感情が伝わるのだと考えている。そして文体の美しさ・完璧さは、それらの同感関係を前提とした上で、それらがどのようなものであるか、より厳密に言うなら、同感により作り出される関係のあり方に規定されるのだとスミスは論じている。すなわち学説の有効性が依存する状況はこの同感過程により構成されるものであり、状況の分析はこの同感という作用に注目して行われるということになる。このような点から、他人との言語を介したコミュニケーションを扱うレトリック論において、同感は重要な要素となる。

また、スミスの文体論・レトリック論が、極めて状況的なものであり、したがって状況と無関係に文体の美・完璧さを論ずる構成になっていないことは、これまで何度も指摘したことであるが、それにもかかわらず、というよりそれだからこそスミスは、彼にとつての現代における美しい・完璧な文体は、平明・単純なものであると主張し得た。

既に簡単に言及したが、スミスは、当時の文体の美・完璧さは、その透明さつまり平易で単純であることだと述べている。そしてまたこの観点から、従来の文彩、言葉の彩の有無によりそれを測るレトリック論を批判していた。具体的にはスミスは、優美で荘重ではあるが精密さ・透徹性という点で劣るシャフツベリー卿の文体よりも、スウィフトの平明な文体や、テンブル卿の単純な文体を非常に高く評価していた。⁽⁶⁰⁾

また法廷弁論におけるスミスの見解はより明確にこの点を示している。つまり、スミスは、前節で述べたようなデモステネスとキケロの比較を行ったのち、当時のイギリスにおける法廷弁論のあり方につき論じている。スミスの議論をまとめるなら、次のようになる。当時のイギリスにおいては法廷の判事はよく教育された人からなり、法制度もまたよ

く整っているので、キケロのように相手の情動を動かそうとしてそのために立証しうる事実とし得ない事実をないませにして、全体として、後者をも真実らしく見せるなどということは全く必要がない。まさに立証しうる事実のみを、平明に、単純に提示すればよいのである。⁽⁶¹⁾

以上の点と前項での内容を考え合わせるなら、スミスがある一定の人間関係のあり方を前提とした上で、文体の美と完璧さをその平明さと単純さにあると考えていたことは、言うまでもないことである。そこにおいてスミスが前提としている人間関係とは、次章で示すような同感をその基礎として成り立っているものである。『道徳感情論』において同感とは、判断という作用を通じてある一定の人間関係を形作る原理として展開されている。言い換えるなら同感とは人間が他人と感情 (sentiment) を伝え合う (communication) 場を作り出すものであり、そのことを通じて一定の人間関係を成立させるものである。この基本的には対面的な関係が積み重なることにより、一定の社会関係を作り出し、それがある程度固定化すれば制度となる。前述のようにこの同感に基づく人間関係は、それを前提として初めて相手に自分の感情を伝えることができ、それによって、例えば説得や教示などの目的を達することができるのであった。つまり、同感に基づく人間関係は、文体の美や完璧さを規定する「状況」である。

しかしながらここで注意すべきは、『修辞学・文学講義』でスミスが用いている同感と、『道徳感情論』で用いた同感とは、その構造や作用が異なるという点である。これまで同感という概念を全く説明なしに用いてきたが、『修辞学・文学講義』の中で同感それ自体について、具体的に説明されてはいない。言うまでもなく、同感とは『道徳感情論』における中心概念であり、そこでは、同感とは、人—人関係における道徳判断の原理として提示されている。しかしながら、同じく同感というタームを用いてはいても、『道徳感情論』で展開されている道徳の世界と、『修辞学・文学講義』で展開されている他人との言語を介したコミュニケーションの世界とは、その要素も、構造も異なる。この二つの世界の相

違点が、それぞれの同感の構造の違いに現れている。したがって、この二つの世界を、同感というキータムが共有されていることから、直接に同一視することは出来ない。

すなわち、以下で詳しく見て行くように、道德の世界を構成するのは、各個人のもろもろの行為とそれに対する判断である。同感とは、人々関係における道德的判断の原理である。ここでは、判断者と被判断者との間に常に緊張関係が存在し、またそのような緊張関係の中で、同感とは、判断者と被判断者の双方に対して機能する。それに対して、他人との言語を介したコミュニケーションの世界は、メッセージの送り手の感情 (sentiment) と、受け手の同感により構成される。そこでの同感とは、送り手の感情 (sentiment) がいかにして受け手に対して伝達されるか、という局面でのみ問題にされる。その意味で、レトリック論における同感とは、一方向的なものということが出来る。つまり、『修辞学・文学講義』における同感とは、感情 (sentiment) を伝達し、一定の目的を達成する手段としてとらえられており、『道德感情論』における同感のように、判断としての要素はない。したがって、観察者と行為者という立場の異なる二者の関係を基本構造として描かれる道德の世界およびそれら二者の双方に働く同感と、メッセージの送り手の感情 (sentiment) の伝達として一方向でのみ働く同感とは区別されなければならない。なぜなら具体的には次の章で展開するように、スミスの道德の世界の特色は、双方向的な呼应関係を持つ同感判断により、構成されるところにあるからである。

以下では、前節で検討した認識論における習慣や慣習における論理とはもちろん、『修辞学・文学講義』のなかで扱っていた一方向的な同感とも区別された同感判断により構成されるスミスの道德の世界の構造特色について具体的に考察する。その際の重要な視点は、道德判断としての同感の作用であり、そこにおける判断者と被判断者との間に生ずるズレ・緊張関係である。

註

(1) この講義録の出版のいきさつについては、久保芳和「アダム・スミスに関する最近の二つの情報」関西学院大学経済学論究第十六巻2号(一九六二年一月)を参照。

(2) スミスがオックスフォード留学時代に、当時週に二度ほどしか講義が行われていないなど、停滞の極みにあったオックスフォード大学にあって、図書館にこもり、古典・古代の文献のかなりの量を読んでおり、したがって、この方面に非常に造詣が深かったことは、よく知られた事実である。しかしながら、本文でも述べているように、スミスにおける文学への関心の高さそれ自体と、『修辞学・文学講義』の位置付けは、まったく別の問題である。

(3) エディンバラ公開講座の性格、ケイムズ卿との関係については、福鎌忠恕「アダム・スミスとエディンバラ公開講座——スコットランド道德哲学者の生誕——」福鎌訳・デューゴールド・ステュアート著『アダム・スミスの生涯と著作』(御茶の水書房・一九八四年)所収に詳しい。

(4) 篠原久『アダム・スミスと常識哲学』(有斐閣・昭和六十一年)、篠原久「スミスの人間観」久保芳和他編著『スミス、リカードウ、マルサス』(創元社・一九八九年)所収、参照。

(5) W. S. Howell, *Eighteenth-Century British Logic and Rhetoric*, 1971. 以下「レトリック論の歴史につづいて」G. A. Kennedy, *Classical Rhetoric and Its Christian and Secular Tradition from Ancient to Modern Times*, 1980. C. M. Thomas, *Rhetoric in the European Tradition*, 1990. を参照。

(6) Howell op. cit. p. 536.

(7) Howell op. cit. p. 546.

ハウエルによるな⁶レー(J. Rae, *Life of Adam Smith*, 1895)⁷ハースト(F. W. Hirst, *Adam Smith*, 1904)は、それぞれスミスの『修辞学・文学講義』を“Lectures on English Literature”と呼び、スコット(W. R. Scott, *Adam Smith as Student and Professor*, 1937)は“Literature and Literary Criticism”に関するものと呼び、それぞれ慎重にレトリックという言葉を避けよう。

(8) Howell op. cit. p. 546-7.

(9) Howell op. cit. p. 547.

- (10) Ibid.
- (11) Ibid. クインティリアヌス (M. F. Quintilianus, c. 35-100) ローマ随一の教育学者、レトリック学者。教育の目的を真の雄弁家の養成と考える。中世、ルネッサンスの教育に大きな影響をあたえた。ラムス (P. Ramus, 1515-72) フランスの論理学者。論理学とレトリック学の結合を目指し、独特の論証の術を形づくる。F・ペーコン、デカルト・ロックにも影響をあたえた。
- (12) Howell op. cit. p. 584.
- (13) ハウエルは「スミスが「レトリックが諸学科の中で真の地位を確保するためには、説得を一般的な機能とするのではなく、それも含めたうえで伝達(コミュニケーション)を、説得に代わる一般機能として想定すべきと考えた、としている」。
- (14) 当時の時代の要請について、ハウエルはそれほど具体的に論じているわけではないが、イングランドとの合邦後の社会発展などを念頭に置くべきであろう。
- (15) Adam Smith, *Lectures on Rhetoric and Belles Lettres*, ed. J. M. Bryce, 1983. 以下「LRBL」と略記する。宇山直亮訳『アダム・スミス修辞学・文学講義』(未来社・一九七二年)。但し、邦訳はロージアンにより出版された一九六三年版を底本としている。
- (16) LRBL §3, 邦訳七一七八頁。
- (17) LRBL p. 12, 邦訳七九頁。
- (18) (17) ことでの「文体」とは style の訳語である。「文体」という訳語は、法廷や議会などにおける口頭のコミュニケーションを含むものとしては、必ずしも適切ではないが、他に適切な訳語が見つからないため、「一応「文体」とすることにした。
- (19) LRBL p. 22-3, 邦訳九五―六頁。
- (20) Ibid.
- (21) LRBL p. 23, 邦訳九七頁。
- (22) Ibid.
- (23) LRBL p. 23, 邦訳九八頁。

- (24) LRBL p. 30. 邦訳一二頁。
- (25) LRBL p. 31. 邦訳一二三頁。
- (26) LRBL p. 36-7. 邦訳一二三四頁。
- (27) LRBL p. 58-60. 邦訳一五七九頁。
- (28) Ibid.
- (29) Howell op. cit. p. 563-4, p. 441-447, p. 695-717.
 ハウエルは、古いロジックをアリストテレスの伝統を受け継いでいるものと規定している。また、新しいロジックをベーコンとロックに示唆を得たものとして、トマス・リード、ジョージ・キャンベル、デュゴルト・ステュアートをその主唱者として挙げている。また、レトリックに関しては、当時次の四つの流れがあったとしている。①キケロ主義者、②レトリックの対象を文体に限定した理論、③演説に対象を限定した理論、④スミスのほか、ジョージ・キャンベル、ヒュー・ブレア、ジョン・ウイザスプーンに代表されるニューレトリック論。スミスが属する④の特徴は、本文でも触れたように、その対象を限定せずに、文章の一般理論をめざし、特に学問的知識の伝達にまでその対象を広げた点が大きな特徴と言える。したがって、スミスのレトリック論の特徴・同時代人との違いを考える際には、ロジックの領域においては、トマス・リードに代表されるような常識哲学派、レトリックの陣営においては、穏健派の牧師たちとの関係が問題となる。これは、両者(常識哲学派と穏健派の牧師)に多くの共通点が認められることを考えるなら、コインの両面をなしている。また、レトリック論だけでなく、道徳論全般にとっても重要な点と言える。
- (30) LRBL p. 136-140. 邦訳一八一七頁。
- (31) Ibid.
- (32) この力は、ハウエルによるなら、学問的知識を伝達するという仕事は、一般の人々(知識を持たない人々)に語りかける際の理論と実践から、重要なことを学ぶという事情に由来するものである。Howell op. cit. p. 564.
- (33) Howell op. cit. p. 695-717.
- (34) Howell op. cit. p. 563-4.
- (35) この点について、本項註7で挙げた伝記で詳しく紹介されているほか、この講義の発掘者であるJ・M・ロージアンが

一九六三年に出版した『修辞学・文学講義』（全集版とは別の版）の序文の中でも触れられている。Adam Smith, *Lectures on Rhetoric and Belles Lettres* 1762-1763, edited by M. Lohian, 1963, p. xv-xvii, 邦訳十四・十六頁。註15参照。

(36) John Millar (1735-1801) は、グラスゴー大学法学教授であるとともに、エディンバラにおけるスミスの講義を聴講し、スミスを慕ってグラスゴーへ移り、ここでもスミスの論理学の講義に出席していたことが確認されている。

(37) LRB L p. xvi, 邦訳十五頁。

(38) 内田義彦『作品としての社会科学』（岩波書店・一九八一年）一二〇―一二頁。

内田は右の論文において、『修辞学・文学講義』をスミスの思想体系における「底辺としての文学」、文学的なもの」という形で基礎付け、それを社会科学（経済学）の生誕という局面でおさえ、またこのことのもつ思想的インプリケーションについても指摘している。

また内田は、「底辺としての文学」という観点から、本文で取り上げたロージアンの見解、ならびに前節で触れたハウエルの見解に対しても、異議を唱えている。

(39) 内田・前掲書 一三四頁。

(40) 内田・前掲書 一三六頁。

(41) Adam Smith, *The Principles which lead and direct Philosophical Enquiries illustrated by the History of Astronomy*, p. 45-47 in ESP.

(42) 状況の思维様式及び法的思考・レトリック論・トピック論との関係については、以下を参照のこと。Th. Viehweg, *Topik und Jurisprudenz*, 1954. 植松秀雄訳『トピックと法律学』（本鐸社・一九八〇年）、Ch. Perelman, *L'Empire Rhétorique*, 1977. 三輪正訳『説得の論理学』（理想社・昭和五十五年）、三輪正『議論と価値』（法律文化社）、植松秀雄「レトリック法理論」長尾他編『現代法哲学Ⅰ』（東京大学出版会・一九八三年）。

このことはスミスが美的感覚あるいは美学というものがもつ性質、即ち状況性とも呼び得る性質に着目していたことを示していると考えられる。

(43) また、ロジックとの関係については、ここでは具体的には、扱うことが出来なかったが、前節で取り上げたハウエルの指摘を参考にするなら、次のようなことが問題となるであろう。すなわちハウエルは、新しいレトリック論の提唱と新し

いロジック論とを関連させているが、そこで語られているロジックというものをどのようなものとしてとらえるかという点が、スミス自身に即して、また他の新しいロジックの論者との関連の中でスミスをどのように位置付けるかという二重の意味で問題になる。これらの点につき、ここで論ずることはできないが、ロジックをレトリックと対立的にとらえるのではなく、人間の思考過程の一つの側面としてとらえるなら、『言語起源論』（『修辞学・文学講義』の第三講として展開されただけでなく、改めて『道徳感情論』第二版以降の付録として、収められている。）の中で扱っているような分類・抽象・反省などの能力についても考え合わせる必要がある。また、これらの能力がスミスにおいては、言語の問題として語られている点についても考察すべきであろう。つまり、ここでは具体的には扱えなかったが、スミスにおける感情・言語・論理・伝達（コミュニケーション）という諸観念の間の関係をもう一度整理し直す必要がある。また、当時言語起源論という形での議論が流行していたことの意義、またその後の消長については、坂本百大『言語起源論の新展開』（大修館書店・一九九一年）参照。

ロジックとレトリックの関係は、スミスにおける社会科学の方法論の問題と深く関係している。周知のようにこれはこれまで、経済学の生誕の観点から論じられてきた。これらの点につき、筆者は、スミスが伝統的道徳哲学の枠組みを借りつつも、狭義の自然科学とも、狭義の倫理学とも、相対的に区別される、人間と社会の関係を扱う学問としての社会科学の方法を模索していたのだと考えている。この点については、本稿では詳しく論ずることはできなかったが、いずれ稿を改め論ずることにする。また、これらの問題をより意識的にテーマ化したのは、J・S・ミルである。ミルに関しては、以下を参照のこと。村林聖子「J・S・ミル『論理学体系』第六巻の成立背景」北大法学研究科ジュニア・リサーチ・ジャーナル二号（一九九五年）。

(44) スミスはこの両者の弁論の違いがそれぞれの言語としての国語の違いに部分的に依存すると指摘している。ギリシア語は「明快・活発」な性質をもち、ラテン語はそれに比べ「莊重・嚴肅」な言語であると言いうると述べ、「本来あらゆる言語は、等しく柔軟であり、あらゆる様々な気質に合致する」のであるが、実際には「ギリシア語の作家たちの文体に比べ、ラテン語の作家たちの文体は、嚴肅さと気取った威厳と装飾をより多く含んでいる」(JRB, p. 142, 邦訳二九一頁)。しかしながら、このような指摘・分析は、これらの作家の文体の違いを、各々の言語の違いに還元しようということではない。スミスは、本文以下に述べるような様々な要因を挙げ、文体についてよりよく理解するためには、そのような要因につい

でも観察することが必要であると (LRBL, p. 148, 邦訳三〇〇頁) 述べ、続けて各々の国の状況と人々の気質につき詳しく論じている。

(45) LRBL p. 148, 邦訳三〇〇頁。

(46) LRBL p. 150, 邦訳三〇二頁。

(47) LRBL p. 150, 邦訳三〇二頁。

(48) Ibid.

(49) スミスは、アテネに関して次のような興味深い指摘をしている。アテネは、デモステネスの時代よりずっと以前に既に民主化していた。ペリクレスの助言により、民衆から兵士に対して給与が払われるようになったことがその契機である。その背景としては、商業が盛んになったことにより、下層の人々であつても財をなし、行政長官に就く機会を、貴族達と同様に持つようになった点を指摘している。しかしながら、他方で、この商業の発展により、それまでは、民衆の支持を得るには、外国との戦争により戦利品を国内にもたらすしかなかったものが、同胞市民から掠奪して、他の市民へ与えるというより容易な方法が可能になってからは、誰も戦争という方法を取らなくなった。つまり、「商業と贅沢が、国事の状態を一変させた」としている。

そして商業が国中の人々に、公益や手工業を持ち込んだので、人々は裁判所に出頭するという仕事を好まなくなった。つまり、これらの役人は、くじ引きで、最も貧困な人々からも、最も裕福な人々からも同様に選ばれていたが、人々は家業を休み、一文にもならない仕事を行うことを好まなくなつたのである。これに対し、前述した兵士に対する給与と同様に、裁判所で勤務したもの、更には、劇場を観劇のために訪れる者に対しても、日当が出されるようになった。その結果、市民は全く怠惰・消極的になつてしまつた。つまり、「アテネ市民は、家に居て、そして劇場にだけ行つただけで、外国で軍務に服するのと同じ給与を受けることになつた」。アテネ市民は、いまや「ギリシア中で最も進取の気性のある市民から最も怠惰にして最も消極的な人々になりさがつてしまつた」。それはかつてのスパルタやシラクサ、その他との戦争において、全力を挙げて勝敗に賭けていた姿とは全く違つてゐた。(LRBL p. 138-153, 邦訳二九〇-二九九頁。)

以上のようなアテネの民主制に対する評価は、商業および富の両義性についての、また年金あるいは利子生活者に対するスミスのその後の態度へとつながるものと言える。

- (50) LRBL p. 151-2. 邦訳三〇三四頁。
- (51) LRBL p. 152. 邦訳三〇四頁。
- (52) LRBL p. 152. 邦訳三〇五頁。
- (53) Ibid.
- (54) LRBL p. 153. 邦訳三〇六七頁。
- (55) Ibid.
- (56) LRBL. これは当時のレトリック論における区分のひとつである。
- (57) LRBL p. 187-9. 邦訳三六一―四頁。
- (58) LRBL p. 22-3. 邦訳九六頁。
- (59) LRBL p. 51. 邦訳一四七頁。
- (60) LRBL p. 22-3. 邦訳九六頁。
- (61) 出口勇蔵は、「アダム・スミスの『修辞学および文学論』講義」（京大経済論叢一〇七卷十一号 一百六五年）の中で、このようなスミスの現代の文体に関する評価が、市民社会の担い手としての中流および下層の人々の書く文章であったとして、この点を経済学におけるスミスの主張と結び付けている。

※ 本稿は、平成六年度・北海道大学審査博士学位論文の一部（連載三回目）である。

THE HOKKAIDO LAW REVIEW

Vol. XLVII No. 3 (1996)
SUMMARY OF CONTENTS

Structure of reciprocity in Adam Smith's theory of sympathetic judgment and his natural jurisprudence (3)

Masako MACHIMURA INOUE*

Introduction

I. Modern natural law and social contract theory (Vol. 47, No. 1)

II. Sphere of moral

II-1 Sphere of moral

II-2 *Structural transformation of moral philosophy*

II-3 Epistemology and moral philosophy: Of the external senses

(Vol. 47, No. 2)

II-4 Lectures on Rhetoric and Bell Letter

II-4-1 Introduction

II-4-2 Characters and historical position of Lectures on Rhetoric
and Bell Letter

II-4-3 On style

II-4-4 Three types of discourse and their aims

II-4-5 Validity of discourse and situation

II-4-6 Rhetorical discourse

II-4-7 Structure and function of sympathy in the communication of
sentiments: the difference from the sphere of moral (in this volume)

*Lecturer, Faculty of Law, Hokkaido University, Doctor of Law

Ⅲ. Structure of Adam Smith's theory of sympathy

Ⅳ. Adam Smith's theory of justice and his natural jurisprudence

summary

In the chapter 2, in order to make clear the structure and characters of Adam Smith's moral philosophy, I shall discuss contiguous areas to sphere of moral in a narrow sense. At first, I shall examine character of Adam Smith's sphere of moral, referring to his own comments on both other former and contemporary doctrines on moral philosophy. Next, I pick up his theory of epistemology, "of external senses". I shall show that his theory of epistemology is influenced from Hume's theory, but otherwise he designs his theory of epistemology and moral philosophy are relatively independent each other. At last, I focus on his theory of rhetoric, "Lectures of Rhetoric and Bell Lettre", which is the beginning of his scholarship, whose area is communication by language in general. Through this discussion I shall show his basic conception and method common to his moral philosophy, economics and his theory of rhetoric. At the same time, I shall exam the difference between the process of sympathy in his theory of moral judgment and in his theory of rhetoric..